



60 周年式典中間報告

会長挨拶 会長 鈴木孝純君

今週の3月5日（木）は二十四節気の第3の啓蟄（けいちつ）にあたります。「啓」は「開く」、「蟄」は「土の中に隠れ閉じこもること」を指し、野山の草木が発芽して、虫も春暖を感じ、穴から出ようとする活動的な季節を意味しております。また、3月は年度末にあたり、役所や会社関係では慌ただしい日々を迎える一方で、卒業そして次のステージへの準備などで新たな希望を抱いている子どもたちも多いかと思えます。

さて、先月末の新聞で、日本において2025年に生まれた外国人を含む子どもの数は70万5809人となり、統計を始めた1899年以降で最少を更新したとの記事がありました。このことは、今後の日本の高等教育の在り方に大きな問題を投げかけています。中教審の予測している大学進学率57%から推計すると、昨年の出生児の17年後の大学志願者数は約402千人となります。しかし現在の大学が受け入れている新入学者数は63万人であり、大学側から見ればその差の228千人の学生が足りなくなる算勘になります。現在、日本には約800校の大中小の大学がありますが、63万人を800校の平均定員に換算すると228千人は約290校分に当たります。つまり『余る大学290校』ということになります。当然、大学側は特色ある大学運営とともに入学者獲得に一層努力を要することになりますが、全入時代の学生は今以上に首都圏に集中することも予想されます。

このような中で、25年前に公設民営の私学として創設された東北公益文科大学も来月から公立大学と新たな出発をします。地域貢献という点から山形県内就職者数も毎年注目されていますが、他大学に引けを取らない地元定着率を維持しています。今年1月末の学生就職内定者213人の内、県内出身学生は147人で、その約49%にあたる72人が県内就職内定者です。また、この中で庄内に目を向けてみると、庄内出身学生は59人で約41%にあたる24人が庄内就職内定者です。この割合は開学以来同じような傾向を示しておりますが、公立化とともに、学生がやりがいや成長を感じられる魅力ある県内企業の存在によって、地元に残る学生数はさらに多くなると考えられます。

また、卒業学生を業種別に調べてみると、毎年同じような傾向が見られます。昨年の割合は、「サービス」29.3%、「卸売・小売」19.9%、「建設・製造」16.0%、「公務」10.5%、「金融・保険」9.4%、「医療・福祉」8.8%、「運輸・通信」5.0%、「飲食・宿泊」1.1%となり、このように多方面に人材を送り出している要因は、公益大学が社会科学系大学であり、その強みを存分に発揮しているからと考えられます。

何はともあれ、少子化・人口減少下において、持続可能なコミュニティを構築するためにロータリークラブは何かができるか、今一度考える必要があると思います。



幹事報告 小野寺佳克君

- 4月6日 旬を楽しむ例会
- 4月20日
60周年記念式典参加の案内
- 式典進捗の中間報告

